

## 神様から与えられた 賜物の用い方

士師記16章17～31節  
2021年9月26日  
松田 基子 師

私たちは、  
『自分の命の与え主は、天地万物を  
創造された創造主なる神様である。』  
と信じています。そこで、大事なことは、神様は  
ただ、人間に命を与えて、この世界に、  
『産めよ、増えよ、地に満ちよと、機械的に、  
送り出しておられるのではない』  
ということです。神様はこの世界に、  
『愛を築いて行くために、ご自身の御心と、  
御計画に従って、一人ひとりに相応しい  
賜物を与えて、』  
世に送り出してくださっています。しかし、人間  
が生まれて来るこの世界は、既にサタンの闊歩  
する所、罪と悪に満ちていて、この世は、  
『如何にして、人間を神様から引き離し、  
自己中心に生きさせて、罪の滅びに引き  
ずり込んで行こうか』  
と、待ち構えているところです。

神様は、世界を麗しくするために、ご自身の  
御心のままに、人間に賜物を与え、送り出し  
ておられるのですが、人はその事を認めず、与え  
られた賜物を、自己中心の考えに立って、自己  
満足の為に使ったり、こんなものは要らないと呟  
いたりしています。そのために自分自身も、周  
りをも、不幸にしてしまうと言う事が至る所に広  
がっているのです。人間は自分の命の与え主  
を知って、創造主なる神様に、自分に与えられ  
ている使命、そのために与えられた賜物の使い  
方を教えられ、聞き従って行かなければ成りませ  
ん。そこに神様は、栄光を現してくださいませ  
す。この生き方こそ、私たち人間が、生きるべ  
き生き方です。

しかし、この世は、神様に背く勢力であり、  
サタンの闊歩する所であり、あらゆる誘惑をもつ  
て、神様に従おうとする者を妨害してきます。  
人間は、その誘惑に如何に弱いかと言うことで

す。今朝は、サムソンの生涯を通して、その事  
に心して参りましょう。

サムソンは紀元前千年代に、活躍した士師で  
す。ところで、聖書は、神様から離れた人間の  
現実を記しています。神様は人間の罪の歴史  
を、人間と共に歩いて、時速5キロの神と言われ  
る様に人間に寄り添い、少しずつ少しずつ救い  
の御計画を、進めてこられました。その歴史が  
聖書には記されています。そのために、  
『聖書なのにどうしてこの様な事が、』  
と思う事が、そのまま記されています。今朝の  
サムソンは真に、その典型です。

さて、彼は生まれる前から、神様からその使  
命を告げられた人物です。主の御使いは、子  
供のいないダン族の、ツォルアに住むマノアの  
妻に現れて、士師記13章3節で告げました。  
「あなたは不妊の女で、子を産んだことがな  
い。だが、身ごもって男の子を生むであろう。  
今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れ  
た物も一切食べないように気をつけよ。あな  
たは身ごもって男の子を生む。その子は胎  
内にいるときから、ナジル人として神にささげ  
られているので、その子の頭にかみそりを当  
ててはならない。彼は、ペリシテ人の手から  
イスラエルを解き放つ救いの先駆者となろ  
う。」  
との言葉が与えられました。

ここに出て来るナジル人と言うのは、イスラエ  
ル人の中で、特別な誓願を守って献身し、主な  
る神様への信仰の純化を目指した人々のことで  
す。神様はこの時、何故そのような人物を誕生  
させようとしておられたのでしょうか。イスラエル  
人は、もう40年もペリシテ人に圧迫され、支配さ  
れ、苦しみ声を神様にあげていました。その  
ペリシテ人と言うのは、イスラエル人が紀元前千  
二百年代に、パレスチナの東側、内陸部から侵  
入してきて、パレスチナに定住したのに対して、  
ペリシテ人は、地中海の海側からパレスチナに  
侵入して来ました。彼らは海洋の世界に生き  
て来て、既に鉄器文化を持ち、商業、政治にも  
優れていました。彼らは五つの都市国家を築  
き、それぞれに領主がいました。その中で一番

南に位置するガザは、エジプトとメソポタミアの通商路の要衝として、商業、軍事、文化において栄えた都市でした。ペリシテ人達は、東への領土の拡大を狙いました。ペリシテ人に一番狙われたのは彼らと隣り合わせになった、ダン部族と、ユダ部族です。ペリシテ人達は、ダンとユダに圧迫を加えました。後にダン部族はペリシテ人の圧迫で、北方に移り、イスラエルの最北端に住む部族となりました。マノアの時代はまだ、ペリシテ人の圧迫を受けながらも、止まっていた時でした。

マノアの妻は、主の御使いの約束の通りに、元気な男の子を産みました。男の子はサムソンと名付けられました。太陽の人と言う意味です。彼はその名の通り、イスラエルに光をもたらす人物になれたのでしょうか。

13章24節には、

**「主はその子を祝福された。主の霊が彼をふる居立たせ始めた。」**

とあります。神様は彼に、ペリシテ人と戦うための勇気と力を、それも異常な怪力をお与えになりました。サムソンは成長すると、同胞が恐れるペリシテ人に対して、全く恐れを感じることなく、ずかずかと彼らの中に入って行って、ペリシテ人を圧倒しました。

その初めは、近くのペリシテ人の娘に心惹かれ、結婚することによって婚縁の席での、謎解きトラブルから、ペリシテ人との敵対関係に入り、その顛末は、互いに報復の応酬で、サムソンは、岩波訳では、キツネ三百匹の尾と尾を結んで、松明(たいまつ)を点け、150組にして放ち、麦束の山、麦畑、ぶどう畑、オリーブ畑を焼き払い、ペリシテ人の怒りを買って、岩山に逃げ込みました。ペリシテ人はユダ族を圧迫して、サムソンの引き渡しを求めて来ました。ユダ族は彼らがサムソンに危害を加えることはないとして、サムソンを縄で縛り、ペリシテ人に引き渡しました。ペリシテ人達は歓声をあげて、サムソンに向かおうとしましたが、主の霊がサムソンの上に激しく降り、サムソンは落ちていたロバの顎骨(あごぼね)で、ペリシテ人千人を倒しました。

ペリシテ人はサムソンが居る限り、イスラエル

を制圧して、領土を広げることは出来ないと思われました。そこでペリシテ人の領主達は、サムソンの命を狙いました。一方サムソンは全くの怖いもの知らずで、また、若者であって、都会に憧れる思いもあり、ペリシテ人の大都会であるガザへ行こうと思いつき、遠い道を好奇心に満ちて、誘惑の町ガザにやってきました。若いサムソンは、ガザの町に辿り着くや、魅了されてしまいました。そこには遊女宿が沢山ありました。彼は一人の遊女に心惹かれ、その宿に入りました。

怪力サムソンの存在は、既にガザの町に聞こえていました。彼らはサムソン殺害の好機と考えました。都市国家と言いますのは、城壁で囲まれていて、出入りに門があるのですが、彼らはその城壁の門で待ち伏せをしていました。一方、サムソンは、夜中に起きて、遊女宿を出ると、町の門まで行きました。出入りは勿論しまっていました。そこで彼は町の門の扉と、両脇の門柱を掴み、門(かんぬき)諸共、引き抜いて肩に担ぎ、山の上まで運び上げたのでした。如何に怪力であったか、神様は、ものすごい力をサムソンに賜物として、お与えになったものです。

サムソンはその事に付いて、神様が、どうしてこれ程の怪力を自分に与えられたのか、彼にその自覚がどれ位、有ったのだろうかと思います。彼は次第に、その怪力を過信して行きました。16章4節を見ますと、

「その後、彼はソレクの谷にいる

デリラという女を愛するようになった。」

とあります。ソレクの谷は、サムソンの故郷ツォルアから、それ程遠くはありません。デリラの名前の意味は、

『思わせぶりをする』

と言う意味だそうです。彼女はペリシテ人の遊女であったであろうとされています。サムソンの遊女通いが始まりました。その事が領主の耳に入り、他の領主達に、デリラを使って、サムソンの怪力の秘密を探り、力を奪い、彼を捕らえ、殺そうと言う相談が始まりました。

領主達は、そのために一人、銀千百枚をデリラに与える事にしました。領主5人が皆、賛同

したのであれば、相当の大金になるでしょう。デリラは自分にとって、これ程魅力的な話はありません。彼女はお金のために、思わせぶりの言葉を言い、遊女の仕事をしているのですから。デリラが全く仕事だと割り切っているのに対して、サムソンはそうではありませんでした。サムソンにとって、遊女は誘惑でした。誘惑と言うのは、誘惑される本人に、その誘惑に対して、

『満たされたい願望がある』  
と言います。例えば、甘党の人は、高級なお菓子を出品されると、我慢する事は難しく、すぐに食べてしまいますが、辛党で、甘い物が食べたくないと言う人にとっては、それが幾ら高価であっても、何の魅力も感じないどころか、他人にあげても惜しくないものです。

菓子の話なら、それが命取りになる事はないでしょう。けれども、サムソンは、最も大切な信仰を揺るがす誘惑に、引っかかってしまいました。サムソンは綺麗な女性を見ると、すぐに心惹かれた様です。サムソンは神様に、心惹かれるのではなく、デリラに、

『思わせぶりをする』  
と言うことを知りながら、その虜になっていきました。サムソンは、自分自身のそう言う心にストッパーが掛けられませんでした。

『神様との関係に入り込んで  
来る様な存在には、関わらない』  
と言う勇氣はありませんでした。思わせぶりのデリラは、6節で、

「あなたの怪力がどこに秘められているのか、  
教えてください。あなたを縛り上げて  
苦しめるのはどうすればいいのでしょうか。」  
と聞いています。サムソンは、初めは警戒して、  
「乾いていない新しい弓弦7本で縛ればいい。  
そうすればわたしは弱くなり、  
並の人間のようにになってしまう。」  
と答えました。

デリラは領主達に連絡して用意させ、それでサムソンを縛り、奥の部屋には待ち伏せする者を置いて、

「サムソン、ペリシテ人があなたに」と  
呼び掛けましたが、  
「サムソンは弓弦をまるで、麻のひもが

火にあぶられて切れるように  
断ち切ってしまった。」

と記されています。

サムソンにはデリラがペリシテ人に頼まれて自分を捕らえようとしている事が、十分に分かった筈です。しかし、それでデリラとの関係を切る勇氣を持ちませんでした。サムソンにとって、女性の誘惑は強かったし、もしかして、

『自分を本気で愛してくれるかも知れない』  
と言う、仮定的願望があったのではないのでしょうか。仮定的願望と言うのは、どこまでもこちら側の願望であって、相手が変わることは無いのです。しかし、そこが断ち切れないのは、昔も今も同じです。

サムソンはデリラに再び言い寄られて、また何とか誤魔化します。しかし、3度目に言い寄られると、サムソンは、

「わたしの髪の毛7房を機(はた)の縦糸と  
共に織り込めばいいのだ。」

と答えてしまいました。サムソンは秘密の本心に、近づいてしまいました。デリラの巧妙さからは、逃げる以外にないのに、どんどん奥に引き込まれて行きました。サムソンは3度目も怪力で、釘も、機織り機と縦糸を引き抜く事が出来たので、自分は大丈夫だと思っていますが、陥落は目の前に迫っていました。デリラはサムソンに何と言えども打ち明けるか知っていました。来る日も来る日も、彼女はサムソンにしつこく迫りましたので、彼はそれに耐えきれず、死にそうになり、17節に、

「ついに心の中を一切打ち明けた」  
のでした。

「わたしは母の胎内にいたときからナジル人として神にささげられているので、頭にかみそりを当てたことがない。もし髪の毛をそられたら、わたしの力は抜けて、わたしは弱くなり、並の人間のようにになってしまう。」  
と、打ち明けてしまいました。

デリラはサムソンの本心を知って、領主達を呼び寄せました。彼女はサムソンを、自分の膝を枕にして眠らせ、彼を欺いて、その髪の毛7房全てを剃り落とさせました。そして、何時ものように、

「ペリシテ人があなたに」

とサムソンを起こしました。彼もまた何時ものように出て行って、

「暴れてくる」

と言ったのですが、既に、主はサムソンから離れておられました。彼は唯の人となり、捕らえられ、目をえぐり出され、ガザにつれて行かれ、青銅の足枷(あしかせ)を嵌(は)められ、牢屋で、粉ひきをさせられました。サムソンにとって、それは思っても見なかった、死よりも辛いことでした。

しかし、そこで初めて、自分が神様に聞き従わなかった罪を示され、怪力は神様から託された賜物なのに、それを、

『自分の思いで、自分の為に使った罪』

に、気付き、深く悔い改めたのでした。神様はその、サムソンの心を、受け入れてくださいました。そして、彼の髪の毛は、剃られた後、また伸び始めました。それは何より、神様はサムソンをお見捨てにならず、彼を尚愛し、支えて居て下さることの証明でした。ペリシテの領主達は、ガザに集まって、自分達の神ダゴンに、盛大な奉献祭を催しました。祭りが盛り上がった時、領主達は、サムソンを見せものにするために、牢から引いてこさせました。建物の中も屋上も、人で溢れていました。サムソンは手を引いてくれていた者に、建物を支えている柱の所に連れて行ってくれるように頼みました。

サムソンはそこで、28節で、祈りを捧げています。

「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こして下さい。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの2つの目の復讐を一気にさせてください。」

祈り終わると、サムソンは建物を支えて居る真ん中の2本を探りあて、

「わたしの命は、ペリシテ人と共に絶えればよい。」

と言って、力を込めて押したのでした。建物は領主達だけでなく、そこに居た全ての民の上に崩れ落ちました。

「彼がその死をもって殺した者は、生きている間に殺した者より多かった。」

と記されています。サムソンはそのようにして、

神様から与えられた、命と賜物を神様にお返ししたのでした。私たちも、サムソンのように、神様から託された賜物を、何か自分の力や努力で得られたかのように、自分勝手な使い方をしていないでしょうか。自分の使命について賜物について、神様にどれだけ尋ね、聞き従っているでしょうか。或る人は、

「わたしは何も出来ません。

わたしに賜物など有りません。」

と言います。それは、神様に祈り聴いていないと言うことです。賜物と言うのは、何か、目に見える形に表れる事を成す事だけではありません。悩みを聴いたり、祈ったり、神様はその人に相応しく、その時、その時に応じて、賜物を与えて下さっています。神様に祈りつつ、聴いて導かれ、従って行く所に、神様がそこに愛を築かせ、ご栄光を現して下さいます。一番の間違いは、神様に聴こうとせず、自分の思い、考えで行動してしまう事です。この世の誘惑は、そこを狙ってやって来ます。私たちは何度も、失敗しますが、繰り返し、主に立ち帰り、油断することなく、神様に聞き従い、与えられた人生を、賜物を主の為に用い、主の栄光を現して行くものとならせていただきます。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

私たちを限りなく愛し、一人一人に相応しく賜物を与えて下さっていることを感謝致します。

他人と比べるのではなく、神様に聴いて、成すべき務めを教えて頂き、互いに愛を築き合い神様の栄光を現す者と成らせてください。

尊い救い主、イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。